

ラフカディオ・ハーンと医薬—癒しと救い ②

水 泳 と 海 水 浴

中 島 淑 恵*

1. は じ め に

ラフカディオ・ハーン (1850~1904) は、1896 年の 9 月から東京帝国大学に勤務することになるが、その翌年からほぼ毎年のように夏休みに家族を伴って焼津に逗留している。その目的は、避暑というよりはやはり海水浴、というよりむしろ水泳で、初め人に勧められて浜松や舞坂にも行って見たが、息子の一雄によれば¹⁾、「いずれも海が遠浅なので、海水浴には好くとも水泳に適さねば」ハーンは決して気に入らず、焼津まで下って「海が深く波も荒い」のを気に入る、「これ究竟の水泳場と大いに気に入って滞在することとなった」のだという（以上、「海へ」303 頁）。

とりわけ焼津では、魚屋の山口乙吉宅の二階に長逗留することとなる。今日では八雲通とよばれる城ノ腰御休町の一角にあったその家は、「蠅と蚊の多い、魚の臓腑と干物の臭気が充満している中に漬け浸されているあの南北の風通を閉じた東西に烈日を受ける天井の低い二階の部屋」であったが、「あんなに敏感なデリケートな神経の父」は「不平ひとつ言わずに月余を借りて愉快がっていた」のだという。その理由を一雄はいくつか挙げているが、焼津の海を気に入ったことのほかにも、東京や横浜の人がいないこと、煩わしい訪問客が来ないことに加えて、何よりも善良で律儀な乙吉の人柄に惹かれたからであろうと述べている。確かにハーンは乙吉のことを「乙吉様神様のような仁です」と形容していたことを一雄は鮮明に覚えていて「子供心にも余りに極端な賛辞だ」と思ったとしている（以上、「海へ」313~314 頁）。

一見したところ、夏休みに家族を伴って海に出かけるあたりは、今日の一般的な家庭のレジャーと何ら変わりのないようにも思われる。確かにハーンは東京の自宅では、一雄に勉強を教える²⁾ほかは書斎にこもって著述にいそしんでいたが、焼津では来客もほとんどなく、身内だけで他愛ない遊びに打ち興じ、息子たちに泳ぎを教えたりしながら家族とゆっくり過ごすのが常であった。また、滞在は一カ月余りにも及んだことから、その実態は

むしろフランスのヴァカンスに近いものであるようにも思われる。事実当時の帝国大学の学年暦は 9 月始まりであり、わが国でも欧米の影響のもとで明治以降夏休みが制度化されることとなったのであるが、家族を伴って一カ月以上も海辺に滞在するというのは、当時としては珍しい習慣であった。今回はこのハーンの愛した「水泳」について考えてみたい。

2. 日本におけるハーンと水泳

確かにハーンは水泳をよく好んだ。妻のセツもハーンが「たいそう泳ぎ好き」であったと述べている。加賀の潜戸を訪れた折³⁾も、「船の後になり先になりして様様の方法で泳いで私に見せて大喜び」であったさまを、セツは「思い出の記」の中で懐かしく思い出している⁴⁾。また、同じ年の夏休みに西田千太郎⁵⁾と杵築を訪れた折も、セツが「すぐ来てくれ」という手紙を受け取って宿に行ってみると、「兩人とも海に行って留守」であり、お金が「靴下に入れて放り出して」あって、「銀貨や紙幣がこぼれ出ている」ことを思い出している（以上、「思い出の記」9~10 頁）。

同じ年の 8 月にはセツを伴って鳥取の八橋を訪れ、浜で水泳を楽しんだ様子をイギリスの日本研究家チェンバレン (1850~1935) に書き送っている。ハーンの言うところによれば、八橋には「素晴らしい浜」があり、「幸いなことに自分は実に上手い泳ぎ手」で、「疲れることもなく 24 時間も泳いでいられるほど」⁶⁾なのだという。ここで興味を引かれるのは、8 月であるというのに、子どもを除いて誰も海に入ろうとする者はなく、自分が泳いでいるのを「珍しいもの (mezurashii mono)」⁷⁾を見るように地元の人々が見物に来るとハーンが述べている点である。

実はハーンの時代、すなわち 1890~1900 年代には、海水浴や海で泳ぐことはわが国ではそれほど一般的ではなかった。漁師など海辺に生きる者たちは難を逃れるために泳ぎを心得ていたが、それは緊急のためなのであって、楽しみのために泳ぐ習慣は未だ定着していなかったのである。

海は日本人にとってむしろ畏怖の対象であった。加賀の潜戸の狭い岩屋を通る折に、あまりに美しい海の様子に、「この岩屋を泳いで通り、涼しい岩影の中を海流に

* Toshie NAKAJIMA
富山大学人文学部
〒930-8555 富山市五福 3190
E-mail: toshie@hmt.u-toyama.ac.jp



図1 山口乙吉宅のあった八雲通り近影 (著者撮影)



図2 明治村に移設されている山口乙吉宅 (著者撮影)

身を任せて漂ったらこの上なく楽しかろう」⁸⁾と考えたハーンが、今まさに船から飛び込もうとしていると、船中の人々に「この海は聖なる水で、神の海 (Kami-no-umi)」なのだとかに制止され、「つい半年ほど前にここに飛び込んだ男の消息はついでに知れない」と脅されてもハーンが一向に納得していないさまを見て取った船頭の老婆は、ハーンの耳元で一言「サメ (SAMÉ)」と叫ぶ。この一言で初めてハーンは、潜戸の洞窟を泳いで渡ることを断念するが、その理由を、「私は熱帯地方で暮らしたことがある」と説明している。この一言は、よく考えれば事情のわからない者には意味不明であるようにも思われるが、これに先立って老婆の発した「サメ」という日本語をハーンが「サメたち (Sharks!)」と複数形で訳している⁹⁾ことも併せて考えれば、合点が行くのではないだろうか。加賀の潜戸は、小さな船一艘が細心の注意を払ってようやく潜り抜けられる狭い岩屋である。その狭く深い海にサメが複数獲物を窺っている様子思い浮かべれば、ハーンならずとも泳ぐのを思いとどまらせるに足る理由であろう。セツがのちに述懐しているところによれば、ハーンは「皆人が悪いというところで、私は泳ぎましたが過ありません。ただあの時、或る時海に入りますと体が焼けるようでした。間もなく熱がひどく出ました」¹⁰⁾と過去の思い出を語ったという。これに続けて、「あああの時です、二人で泳ぎました。一人は急に見えなくなりました。同時に大きなサメの尾が私のすぐ前に出ました」と過去の思い出を語っている (以上、「思い出の記」10頁)。このサメのエピソードが真実のものであるか否かはわからないし、老婆が本当に「サメ」と叫んだのかも疑わしいが、ハーンが海に対する畏怖を語るとき、それを具体的に形象するものとして逸話に「サメ」を配したのだと考えれば納得が行くのではないだろうか。

畏怖すべき恐ろしい海のイメージは、例えば『知られぬ日本の面影』に収められたエッセイ「日本海に沿うて」においても、宿の女中の身の上話という形で語られている。女中はかつて年上の漁師の妻で、夫は妻の弟とともに漁に出て生計を立てていた。夫と弟の最期となった嵐の晩も、他の船より遠くに漁に出ていた二人の船が

ようやく浜に戻り、もう二人の顔が判別できるほど近づいてきたところで横波を食らって転覆し、沈んでしまったのである。二人が「助けて、助けて (Tasukete! Tasukete!)」と叫びながら泳いでいるのは陸にいる者からも見えたが、やがて高波にのまれて沈んでいった。まず弟の姿が見えなくなり、夫はもともと頑丈な漁師だったので、弟よりも長く泳いで、陸で見守っている一同に顔が見えるところまで近づいたが力尽きて海に吞まれていった。海の余りの恐ろしさに誰も手出しができず、妻は、「随分後になってからも毎晩あの時の夫の顔が浮かんできて、休むこともできずただ泣くばかりであった」のだという¹¹⁾。中年になった女中は、これだけの惨事をこともなげに話してみせる。

3. 長男一雄への水練

このような文脈で見てくると、長男一雄が述懐している焼津での海辺の光景は、単なる気楽な家族連れの海水浴ではなく、ハーンが子どもたちに水の怖さを教えながら泳ぎを会得させようとする水練の様相を呈していることがわかる。事実ハーンは「自分の子等には海を熟知させたい、海に関する知識を十分に持たせたいとの希望」を抱いていて、「あなた海を知りまショー、海と友達となりまショー」とよく言っていたという。一雄によればハーンのこの「ショー」という語尾は、「ねばならぬ」の意味である。幼い頃から鍛えられた一雄は「海を余りに恐れます」が、「(次男の) 巖余りに恐れませんが」とハーンはよく焼津で大人たちに述懐していたという。ハーンの一雄に対する水泳指南は具体的かつ的確であり、自ら泳ぎを会得した人間でなければできないような指示であった。ある波の荒い日に泳いでいた一雄は、たまりかねて途中で立とうとするとハーンに叱られ、「立てば沈む、どんなに波が被ってきても浮こうと心がけてさえ居れば安全だ。例え波に攫われるとも浮いてさえいれば助かる。方向を間違えても構わぬ、自若として仰向けになって浮いたまま手足を緩やかに動かして泳げ」と命じられる。このあと思いがけない土用波が来て波に攫われそうになる一雄を、身を挺して助けたのは乙吉であり、ハーンが乙吉を「神様のような人」と感謝し続けた



図3 一雄が土用波に攫われそうになった焼津当日の浜
(著者撮影)

のはそのためでもある（以上、「海へ」336～339頁）。

ところで一雄の述懐の中でもう一つ印象的なのは、水泳するときの服装である。ハーンが一雄に推奨したのは、「浜の子等同然海水衣は疎、猿股や、裨さえない素裸で飛び込むこと」であったが、焼津の海にはクラゲがいるので、「水母防の海水衣を着て海へ這入ったらさぞ安心だろうに」と一雄が言うと、ハーンに「ハハハア、何ほう臆病!」と大いに笑われたという。

初めて焼津を訪れた翌年の1898年には、松江時代の同僚である田村豊久の誘いで焼津ではなく鶴沼に滞在し、田村や横浜から訪れた友人のマクドナルド¹²⁾、雨森信成¹³⁾らと海水浴を楽しんだ。鶴沼の海は遠浅で、東京や横浜あたりからの客も多く騒々しくてハーンはあまり気に入らなかったようである。前年に焼津で乙吉の手助けもあってようやく「幾分か浮きそうになった」一雄も、乙吉なしでは海を恐れるのみで水練にならず、父を少なからず失望させた模様をのちに一雄が述懐している（「海へ」319頁）。翌年以降没年となった1904年まで、ハーンは夏をもっぱら焼津で過ごすこととなる。

4. 明治時代における海水浴と水泳

ところで、わが国における海水浴は、欧米の影響を受けて明治時代に始まったのであり、ハーンが滞在した鶴沼のように、東京や横浜からほど近いところに西洋人や開明的な日本人が訪れる海水浴場が開かれて行った。ハーンはむしろこの近代的な海水浴場と都会の喧騒を嫌って焼津の海を好んだ。この頃の海水浴場の模様をよく物語っているのは、ハーンの没後にあたる1914年に発表された、夏目漱石¹⁴⁾の『こころ』の冒頭部である。ここで少し寄り道して、漱石の描いている鎌倉の海水浴場の様子を紹介しておきたい。

『こころ』において中心人物となる語り手の「私」と主人公の「先生」が初めて出会うのは、鎌倉の海水浴場である。小説では単に「書生」となっているが、「私」は地方出身の帝大生で、「多少の金を工面して」裕福な友人に誘われて鎌倉に来たが、「金の工面に二三日を費やし」とあるので（同7頁）、そうそう右から左に現金が用意できる境遇ではなく、しかし、額に汗して糊口を

しのぐほどでもない、ということがわかる。また、このすぐ後で「先生」と近づきになり日本泳法である「抜き手」で泳いでいることから、おそらく水練の心得のあった武家の末裔であろうということがわかる。「私」と「先生」が出会ったのは、時系列の考証から、1907年前後であろうと考えられている（同329頁注釈より）。ハーンが亡くなったのが1904年なので、この出会いの場面の海水浴場は、ハーンが焼津で夏を過ごしていた頃の都会の海水浴の風景をほぼほぼ活写しているものと考えて差し支えないのではないと思われる。

かくして「私」は毎日海へ入りに出かけるのであるが、その光景は「この辺にこれほどの都会人種が住んでいるかと思う程、避暑にきた男や女で砂の上が動いて」いたり、「海の中が銭湯のように黒い頭でごちゃごちゃしていることも」あった。「私」は、「こういう賑やかな景色の中に裹まれて、砂の上に寐そべて見たり、膝頭を波に打たしてそこいらを跳ね廻るのは愉快であった」（同書9頁）と述べている。

当時の海水浴は西洋人と不可分であったことも以下のような記述からわかる。「私」が「先生」に初めて会ったとき、先生は西洋人と一緒に海に来ていた。掛茶屋でまず「私」の注意を惹いたのは、「その西洋人の優れて白い皮膚の色」である。ここで「私」は、この西洋人の服装に注目する。「純粹の日本の浴衣を着ていた彼は、それを床几の上にすぼりと放り出したまま、腕組みをして海の方を向いて立って」いて、「我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けていなかった」とあり、「私にはそれが第一不思議だった」（以上、同書10頁）と述べている。

実は「私」は、この二日前に由比が浜で西洋人の海水浴の風景を見ているが、そのときの西洋人の服装は、「いずれも胴と腕と股は出していなかった」とある。また、これに続いて「女は殊更肉を隠しがちであった。たいていは頭に護謄製の頭巾を被って、海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしていた」と述べている。だからこそ、「そういう有様を目撃したばかりの私の眼には、猿股一つで済まして皆の前に立っているこの西洋人が如何にも珍しく見えた」（以上、同書10頁）のだという。この記述は、当時の海水浴の光景を物語っているだけでなく、当時の海水浴の服装を証言していて興味深い。ハーンはどのような服装で泳いでいたか、ということとも関連するからである。ハーンは、一雄に対しては浜の子どもと同じように裸で泳ぐことを推奨したが、ハーン自身がどうだったか、ということは記録されていない。当時の常識では男女とも通常コンビネゾン型の水着を着ていたであろうが、もしかしたら漱石の描いているように「猿股一つ」だったのかも知れず、あるいは一雄と同じように全裸だったのかもしれない。このあたりのことはもう少し考証する必要があるものと思われる。いずれにしても、『こころ』の冒頭に描かれている西洋人にハーンの

面影が垣間見えるように思われるのは、穿った見方に過ぎるだろうか。

5. 西洋における海水浴

こうして見てくると、日本の海水浴は明治期に西洋の影響で始まったことがわかる。慶応年間に漂着した船員ワツソンをはじめとして、横浜に滞在した外国人たちが、富岡海岸、片瀬海岸などで海水浴を楽しんでいることが当時の日記などから裏づけられる。その後「日本近代医学の父」とよばれるドイツ人医師エルウィン・フォン・ベルツ（1849～1913）が温泉や海浜での保養を政府に提言することとなった。これを受けて政府の高官たちが相模湾沿岸に続々と別荘を建設、海浜保養を実践することになる。1882年には政府の視察団が英国のブライトン海浜保養地を視察している。この流れと並行して、武家に受け継がれてきた日本古来の水練を海で行うことを男子の身体鍛錬の方法の一つとして採用する学校が増え、学習院は片瀬、慶応は葉山、東京帝国大学は逗子に水練場を設けている。ハーン晩年の海水浴もこのような文脈の中に位置づけられるもので、東京や横浜近郊の海岸はすでに人が多く、知人にも会い煩わしいので、当時はまだ開拓されていなかった焼津に東の間の安住の地を求めたのではないかとと思われるのである。ハーン一家は焼津和田浜でラムネを飲んで一時の涼を楽しんだことも知られているが、ラムネの製造が日本で始まったのは1887年のことであり、一カ月も長逗留して家族で海水浴に打ち興じ、時にラムネを飲むこの一家は、当時の焼

津では目立ってハイカラな存在であったことは間違い無い。

ところで、西洋でも海水浴は古代から綿々と行われていたわけではない。ローマ帝国はいざ知らず、西洋では中世以降、伝染病を媒介するという懸念から、入浴の習慣すら失われていた。療養としての入浴が始まるのは、近代医学や公衆衛生学が産声を上げた18世紀末のことである。西洋最古の海水浴場は、1740年に設置された英国北海沿岸のスカーバラだとされる。これに次いで1754年、英国の医師リチャード＝ラッセルが、英国南部のブライトンに海水療養所を開設した。これに鉄道の敷設が拍車をかけ、自家用の馬車でなくとも鉄道で旅行できるような階層の人々が、各地のブルジョワ的なリゾートに押し掛けることになるのである。

6. おわりに

それではハーンはその達者な水泳をどこで会得したのだろうか。ハーンと海について語るとき必ず言及されるのが、生まれ故郷ギリシアのレフカダ島である。ハーンの父親は英国軍医であり、海水浴の効用についての知識があったかも知れない。しかし、ハーンがレフカダで育ったのは2歳までであり、光景としての海が幼時の記憶に深く焼きつけられたことはあっても、泳ぎを覚えるということはこの時期にはなかったのではないだろうか。アイルランドで育った幼少期および学校時代、父は軍務で不在がちであり、熱心なカトリック信者の大叔母の影響下でカトリック系の学校に通ったハーンが、退学を余儀なくされる17歳までに学校で水泳を習うことはなかったし、家族で海水浴に出かけるようなこともなかったのではないかとと思われる。その後、19歳でアメリカに渡るまでのハーンは実はどこで何をしていたのかははっきりしないのであるが、気楽に海水浴のため保養地に長逗留するような境遇でなかったことは確かである。アメリカに渡ったハーンはニューヨークからすぐに内陸部のオハイオ州シンシナティに向かっているし、ここで



図4 ハーンが子どもたちとラムネを飲んだ焼津和田浜（著者撮影）



図5 八雲通り近くの焼津の浜から富士山を望む（著者撮影）



図6 マルティニーク近影（國重 裕氏撮影）

も糊口をしのぐのがやっとなで、水泳に打ち興じる余裕はなかったであろう。

ハーンが水泳を楽しんだことがわかるのは、ニューオリンズに移り住んでから、1884年8月末から一カ月余り、1886年7月初めから同じく一カ月ほど取材を兼ねて滞在したメキシコ湾内のグランド島から友人に書き送った手紙によってである。その後、1887年から来日直前の1889年にかけての2年間を仏領西インド（マルティニーク）で過ごしたハーンは、5時に起床し、朝食後ひと泳ぎして調べ物や著作活動などの仕事にとりかかり、昼食後は午睡、7時には夕食をとって9時には就寝するという極めて健康的な生活を送ったらしい¹⁵⁾。ハーンが晩年焼津で夢見たのは、おそらくこのマルティニークでの楽園のような生活だったのではないだろうか。しかもマルティニークの時とは異なり、子宝にも恵まれ、家族団欒もかなった夏休みである。とはいえ、ハーンの心の中に去来したのは、もう二度とマルティニークでのあの平和な日々は戻らない¹⁶⁾という哀惜と、子どもたちの成長した姿は恐らくもう見られないだろうという訣れの予感¹⁷⁾だったのではないかと思うと、今も変わらぬ子どもたちが浜辺に遊ぶ情景は、一層胸に迫るものがある。

注

- 1) 以下、一雄の回想は、『父八雲を憶う』の「海へ」（『小泉八雲』恒文社、1976年）から引用し、本文には頁数のみを示す。
- 2) ハーンは長男一雄を小学校にはやらず、家庭で教育を施していた。ハーンは家庭教育（ホーム・ティーチング）についてはまた稿を改めて論じたいが、没年となった1904年の4月に次男巖を大久保尋常小学校に入れるのと同時に、一雄も同小学校の4年生に編入学させている。ちなみにわが国では、1900年には小学校は4月入学となったが、帝国大学は以降しばらくの間9月入学の状態が続いていた。
- 3) ハーンが妻を伴って加賀の潜戸を訪れたのは、松江滞在中も終わりに近づいた、1891年（明治24年）9月初旬のことであったとされる。
- 4) 以下、「思い出の記」の引用は、『小泉八雲』（恒文社、1976年）により、本文にはタイトルと頁数のみを示す。
- 5) 西田千太郎は当時松江尋常中学校の教頭で、ハーンが松江に赴任した折には通訳を務めた、松江におけるハーン最高の理解者であり助力者であって、ハーンが深く親交を結んだ人物である。
- 6) 引用は、Life and Letters edited by Elizabeth Bisland in three volumes, Vol. II, Boston and New York, Houghton Mifflin Company, 1922, p. 149 による。和訳筆者以下同じ。
- 7) ここでハーンは「珍しいもの」を英語に訳すことなく、日本語の発音のままアルファベットで表記している。当時ハーンの行動はさまざまところでこのような地元の人間の反応を惹き起こしていたので、地元の人が「珍しいもの」見たさに見物に群がるのはハーンにとっては見慣れた光景になっていたであろう。
- 8) 以下、加賀の潜戸のくだりの引用は、The Writings of Lafcadio Hearn, Vol. V, Boston and New York, Houghton Mifflin Company, 1922, p. 253-254 による。
- 9) この複数形の問題は、後にハーンが芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」の句を英訳したときに、蛙を複数形で訳したことで物議を醸したことを彷彿とさせる。今日の研究では、蛙は複数形であるほうが蛙合戦の実態にふさわしいという説もあるが、これについても稿を改めて論じる価値のある問題であろうと思われる。
- 10) セツの「思い出の記」はハーンが語ったままにその拙い日本語を伝えている。ハーンの日本語は家族、とりわけ妻と「へるんさん言葉」とよばれるいささか不思議な日本語で意志の疎通ができる程度のもので、当然のことながら著述や講義はすべて英語、門弟とももっぱら英語で話し、必要があれば門弟が通訳を務めていた。
- 11) 以上引用は、The Writings of Lafcadio Hearn, Vol. VI, Boston and New York, Houghton Mifflin Company, 1922, p. 119 による。
- 12) ミッチェル・チャールズ・マクドナルド（Michell Charles McDonald, 1853～1922）、米国海軍主計官で、来日後のハーンと親交を結び、ハーン没後も遺族を支えた。
- 13) 姓の読み方は「あめのもり」（1858～1906）、来日後のハーンの理解者。ハーンはのちに「ある保守主義者」というエッセイを雨森に献じている。
- 14) 夏目漱石（1867～1916）はハーンと因縁浅からぬ人物である。第五高等学校（現熊本大学）のハーンの後任が漱石、東京帝国大学のハーンの後任も漱石であり、とりわけ東京帝国大学で漱石はハーンを慕う学生たちからの強い拒絶に遭った。創作上も浅からぬ影響を受けているものと思われる。
- 15) 小泉時・小泉凡共編『増補新版文学アルバム小泉八雲』（恒文社、2008年、67頁）による。
- 16) マルティニークのブレ山は、ハーン来日後の1902年に大噴火を起こし、首都サン・ピエールが壊滅した。のちにハーンはマルティニークのことを「現代のポンペイ」と評している。
- 17) ハーンは没年となった1904年、8月一杯を焼津で過ごし、8月30日に帰京している。心臓発作で息を引き取ったのは、それから一カ月もたたない9月26日のことである。

（原稿受付：2019.8.22）